

まちのキラリ無限大

観光の 原点は「人々の暮らしを見る」とともに、その地域に住む人々が「自ら光を示す」こと…。観光という言葉は中国の古典『易経』にある「国の光を観る」ことが元の意味だとされています。「一国の治世者は領地を放して、よい政治が行なわれているかどうか、人々の暮らしを見て確認した」「人々がいきいきと暮らすことができれば、他国に光を示すことにつながる」と『易経』には記されています。

例えば みなさんは福智中宮の参道をご存じでしょうか。杉林に囲まれ、苔むした石段を上げれば、喧騒を離れた静けさと癒しを実感できます。およそ300m以上も続くこの石段は、日本三大修験山の一つである英彦山修験の一角として、近隣ではその英彦山に次ぐ長さを誇ります。しかし、その存在は町内でもあまり知られず、実際にここを上った人もほとんどいないのではないのでしょうか。町内にはこのような埋もれた「光」がまだまだ眠っています。

今回の 観光促進委員会の答申には「個々は魅力的な観光資源なのに生かされていない」との指摘がありました。そこで、観光資源の「点」と「点」を「線」で結んだ観光ルートの設定が提案されています。国や県でも観光立国や観光経済支援の取り組みが進められていますが、そこでは個々の自治体という「点」ではなく、田川郡、あるいは筑豊という広域の「面」という視点でとらえられています。わたしたちはそういう広い視野と、観光資源を「つなげる」という認識を持つ必要があります。

資源が なければ生み出すことも可能です。例えば、県内最大の桜で樹齢600年以上の「虎尾桜」。町指定文化財で例年数千人の人が訪れる希少種のエドヒガンです。これにちなんで、福智山へと続く道沿いにエドヒガンを千本植えたとしたら、どうでしょう。50年後や100年後には、日本を代表する桜の名所になっているかもしれません。さらに、経費削減のため、その桜をオーナー制度にして植樹すれば、さまざまな人の想いを刻みながら、この町に新たな景色が生まれることとなります。それが県道であれば、費用の支援が受けられるかもしれません。当然、町のイメージもアップします。これを先ほどのように「点」ではなく「面」としてとらえれば、添田の紅葉とタイアップさせたり、現に日本三大修験山の一つ「熊野大峰山」を含む「熊野古道」が世界遺産に登録されているように、福智連峰から香春岳、英彦山へと連なる霊峰（英彦山修験）もPRできます。そういうときに添田の小次郎出身説や福智の武蔵伝説も生きてくるのです。少し視野を広げたり、視点を変えて考えただけでも観光資源という「光」のつながりは広がっていきます…。



福智中宮へと続く石段の参道

国

土交通省は、地域の観光振興を先導した全国の百人を「観光カリスマ」として認定しています。その方々が口をそろえるのが、時の利、地の利、人の利を生かした「タイミングと人とのつながりの大切さ」です。地域の魅力やブランド力を高めるためには、観光資源や人との出会いやつながりが欠かせません。魅力があるところに人が集まり、店が集まり、創意工夫が集まり、活気が集まる…。いま行政には、そのきつかけ作りが求められています。

言

うまでもなく「食」であれば「自分がお金を出して、足を運んでも食へたい」と思えるもの。「観光」であれば「自分が行ってみたい」と思える場所。「まちづくり」なら「自分が住みたい」と思える地域を作ることが基本になります。

観

光促進委員会は今回の答申で「ホスピタリティー（おもてなしの心）」の考え方を中心に据えました。つまり、人の輝きです。ここで暮らす人が、自らの地域に誇りをもつことができなければ、外から訪れたいと思われる町にはならないでしょう。まず、私たちが人や資源の魅力という「光」を磨くことが大切です。住んでよし、訪れてよしの町づくりが実現すれば、独自の「光」や埋もれた「光」、生み出す「光」を私たちの手で最大限に輝かせることができます。

町

では今回の答申をはじめ、現在協議が進められているまちづくり計画の実施計画を踏まえ、今後、魅力あふれる観光行政に着手していく予定です。

まちと人、キラリ、光、つなぎゆく